

第20回アクラス研修（通算80回）感想

感想ををご自由にお書きください。

今日の福島先生のお話で、複言語、複文化の目指すところが、お互いを認める共存であることがより具体的に見えてきました。言語の機能と言語政策の意図、言語をめぐる利害関係などのお話をインドでの経験を考えながら興味深く聞かせていただきました。世界の歴史にある植民地主義が常に言語教育を伴っていた一方、インドにおいて植民地政策の一環である英語習得が、ポスト植民地時代において別の意味合いを持って重要性を持ち続けていることも面白い現象だと思います。異なる言語と文化をもつ人々がお互いを受け入れながら共存することは、容易なことではありません。福島先生がおっしゃるように、政治・経済、軍事的なことも関係してきます。奥が深いです。

日本に来る技能実習生や特定技能の人たちが、これからもどんどん増えていく中、日本側の受け入れ態勢も明確な方向性を示していかなければ、様々な社会問題にもつながっていくと思われまます。先生が、最後におっしゃった「価値の複言語主義」の大切さを痛感しました。教育現場をはじめ、勤務先などそれぞれの現場、日常生活での価値の複言語主義がどれだけ実現できるのかが課題であると感じました。本日は、本当に有意義なお話をありがとうございました。

クラスを運営する上で、ファシリテーターとしての役割を自覚しなければと考えておりましたが、そこに複言語の価値観を持たなければいけないことを本日学びました。また、複言語・複文化主義がヨーロッパで生まれた歴史「言語の多様性から複言語教育へ」を学べたことは良かったです。

2つの視点から書きます。

【ヨーロッパに移住して3年目の者として】

無料で質の高い言語教育を受けることができていることや、重要な公的手続きの際には自治体が電話で日本語通訳者をつけて対応してくれること、そして自分自身もなんとか言語を習得して職に就こうとしていことしていることそのものが、複言語主義政策のねらいの中にあるのだなと思いました。

【海外日本人補習校で国語（日本語）を指導する者として】

現在、4年生を担当しています。帰国・永住者、現地校・インタースクール通学者、背景、やる気など様々ですが、それぞれの意志や気持ちを日本語で率直に伝えられる生徒が多くいます。お互いを認め合う雰囲気を作り出す工夫、仕掛けを考えたいと思いました。

私自身の複言語主義との向き合い方は能力・コミュニケーションとしての目的と共に生きるための目的が同等もしくは皆が社会の構成員であるというスタンスなので、価値としてとらえる意識のほうがより強いといえます。私の職場（日本語学校）では、営利団体なので利害調整のため能力を重視しているといえるかもしれません。現在日本では特定技能などの単純労働の分野で働く外国人が増えています。私は彼らを正直に言えば「かわいそうだ」と思う気持ちもありましたが、介護現場で働く外国人と話をしてみると、誇りを持ち生きている人も大勢いました。彼ら自身は日本語ができるまでは弱い立場だと感じているようには思えずむしろ自尊心が高く、格差社会で弱い立場にある日本人のほうがよほど厳しい現実さらされているように感じます。（もちろん、厳しい現実直面している方々もいらっしゃいます。）またヨーロッパからの学生は自身の語学力を生かした翻訳や通訳オペレーターといったアルバイトなどに従事し、アジア系の学生は同国人のコミュニティーのツテなどを通じて仕事を見つけ活躍しています。良い言葉ではありませんが、この日本社会の中でとても力強くたたかっているように思います。私たちのような複言語・複文化主義という理念を知っているもしくは体感的にわかる人にはこの概念は必然なので特別なことではありません。生活の中であまり外国語や外国人と接点がない人にとっては価値としての複言語主義という概念はモノリンガルという負い目を感じてしまい、価値としてとらえることは難しいのかとも思いました。

外国人を包摂した社会を作っていくためには、外国人のためというよりは、日本人にこそ複言語主義を知ることが必要かと思えます。そのためにも、これから社会を中心となって作っていく若い世代には様々な機会を通じてまたは学校教育の中でより積極的に体験できるようなプログラムを取り入れていくべきです。教えるのではなく、一緒に活動し新しいものが生まれていくような楽しさを自分で感じるプログラムです。

しかし、いくら価値としての複言語主義を人々が意識しつつあったとしても、社会として選挙権などの参政権（居住年数などの条件は付いたうえで）という権利を行使できる環境がなければ、社会への親近感や帰属感といったものが生まれてくる土壌は育ちません。日本という国がヨーロッパの複言語主義の概念そのものを取り込んでいこうとするのであれば、虫のいい話です。「ほかにやれることがあるのではないか」とのお話がありましたが、理念は大切にしつつ、本当に当たり前のことですが移動する子供たちの継承語の課題等地道な実務的努力が必要だと思えます。

また、人類がより高度な精神文化の中で生きていくことを目指すのであれば今までの民主主義を踏襲しては結局社会構造は維持されたままです。先生の資料にありました、「民主的シティズンシップ」という言葉がどのような意味合いなのか気になりました。

私は複言語主義は個人の力にゆだねられているとはいえ、皆が一つの理念を共有してそこに向かっていけるというのは、時間がかかるかもしれませんが、新たな社会を構築できる可能性もあると思っています。まだ理解も不十分ですが、今私ができることは、縁あって一緒に勉強している学生さんが今までどんな言葉話してどんな人生を送ってきたのか、今を見るだけでなく彼らの歴史を知ることです。そして日本語の勉強が彼らのライフに豊かな栄養素としていけるように時間を共有できることを心から楽しむことです。共に生きる感覚がつかめるように言葉を使って知り合っていくことを目標に、頑張ります。

考える機会を得ることができ、貴重なお話を伺うことができ、初心に戻ることであった時間でした。ありがとうございました。

<p>福島先生、嶋田先生、今日はありがとうございました！「複言語・複文化」ということばの意味が自分の中の感覚として取り入れられたような感じがします。事前に資料をいただいていたので、今日のお話がふむふむと理解につながりました。あの資料の中にあった、家族内の「言語政策」の話が私はとても興味深かったです。今の私の言語環境は、中国語が中心の生活で、家の中では「中国語」が共通言語になっています。（何の相談もなく、そうになりました！）ときどき、家の中で、状況（話者の気持ち）によって、その共通言語の使用のルールが無意識的・意識的に破られることもあり、そうなると、家の中に緊張状態が走ることもあったりします。自分の経験から感じるのは、みんなが「わかる」ということは、その場にいる人がその場への参加が認められているということにもつながることになるのかなと思います。</p> <p>今回の研修で、今の自分の日本語教育の環境に対して、思っていたことがなんとなく見えてきました。今、私は台湾で日本語教育に関わっているのですが、JFLの日本語教育に身をおいてみて、ときどき目標言語だけの習得に一生懸命になり、その正確さなどだけに集中してしまいがちになってしまうことに、少し違和感を覚えています。（教育機関によってその差はあるかもしれませんが...）今日のお話で、私は大学で日本語を学んでいる学生たちに、日本語を身につけるだけではなく、「複言語・複文化」的な捉え方で外国語が学べるようになったらいいなと思いました。学生たちが「仲介者」という概念で自分の日本語学習を捉えられたら、もっとその学習が豊かになるのではないかと期待をしています。これは学生だけではなく、教師もそのように見方を考えを持てるようになっていかないといけないのかもしれないと思います。いろいろ考えるきっかけをいただき、ありがとうございました。</p>
<p>本日の寺子屋は、留学生を対象にした「ビジネス日本語」の授業を念頭に、何かヒントがいただければ有難いという思い参加させていただきました。国や文化を超えてキャリアを形成していく留学生の中には、高い日本語力を活かして日本で就職したいと考えているにもかかわらず、日本の職場に存在する日本語規範や言語使用に違和感を持ち、日系企業を選択せず、外資系への就職や帰国の道を選ぶ学生も存在します。大学で授業をしながら留学生に不人気の日本の職場を残念に思うことも少なくありません。福島先生のお話にありました、「複言語主義は、共に生きるための解決方法のひとつであり、言語は共に生活するための『ツール』である」というとらえ方は、非常に分かりやすい解釈であると思いました。さまざまな生活シーンや言語レパートリーをもつ留学生が、キャリア形成のための個人的言語として日本語を使用するととらえれば、言語規範や価値観の違いも異なる視点からとらえることができるように思います。「教員も言語教育における自身の価値観を見せる」という価値の複言語主義は、「授業に自信をもて」と、背中を押していただいたようにも思いました。貴重な学びの時間をいただき、有難うございました。</p>
<p>本日は貴重な機会をありがとうございました。せっかく英国に住む機会がありながら、国家を超えたヨーロッパの理念としての「複言語主義」を理解しておらず、改めて確認させていただきました。</p> <p>また、国として「言語政策」という視点があることも認識させていただきました。20年ほど前に住んでおりましたシンガポールで「Speak good English」という政府の呼びかけが、10年後には継承語教育重視になっていたことは、継承語という他民族国家の財産「国家の損失」を避けるための政府の「意図」と私なりに納得できました。</p> <p>「目の前の学習者は複言語話者」であることを念頭に、彼らの複言語・複文化のエンパワーメントを手助けできたらと思います。</p>
<p>たくさんのご教示いただきありがとうございました。まだ消化しきれていないのが正直なところです。スライドを見直して反芻していきます。</p> <p>自分の教育現場に複言語が必要かに関してですが、例えばプロジェクトワークとか日本語だけではクラスメイトとやり取りが難しい場合や、日本語より複言語の方が深い話ができるのであれば、その必要性を感じます。</p>
<p>事前にいただいた資料に「使えるところは使い、使えないところは捨てる」という一文があり、今回のお話を伺いながら、自分なりに日本社会に当てはめて整理してみました。</p> <p>使えるところ＝複言語主義・教育の目的は「共に生きるための方法」という認識、言語的寛容、価値としての複言語主義（＝自分や他の話者が使用する言語が平等な価値を持っている）。</p> <p>使えないところ＝ヨーロッパという超国家的単位にもとづいた政策、原理原則、帰属意識。</p> <p>また、質問させていただいた「EUおよび国家として、複言語・複文化の習得をどのように保障するのか」については、ご回答くださったように「理念と現実」のギャップの大きさを改めて理解しました。</p> <p>貴重なお話をありがとうございました。</p>

とても詳しい説明をありがとうございました。
言語政策理論の歴史について、その背景についてわかりやすくご説明いただき、ありがとうございました。言語政策という観点から今まであまり考えたことがなかったため、新たな視点を得ることができました。
また、CEFRの複文化複言語の考え方については、少し知識がありましたが、EUと欧州評議会の目指すものや考え方についてなど、深く知ることができました。
今日のお話を聞いたうえで、自分の現場での「複言語・複文化」について考えてみたいと思います。
現在大学院と小学校というかなり異なる現場で日本語教育に携わっています。
今後、そこをどのような「場」として皆で作っていきたいかを考えながら、そこでの複言語・複文化の扱いを柔軟にそして誰もが心地よいものとしていきたいと思っています。

言語のアイデンティティ機能を考えた際、日本語教育の現場においても個人の複言語・複文化性にもっと多くの光を当ててもよいのではないかと、その点で「価値としての複言語・複文化主義」が多くの日本語教師間で共有されるようになってほしいと思います。
日本の場合、国家の言語政策として複言語・複文化主義が標まだ標榜されるようになるにはまだ時間を要すると思いましたが、日常的に「複言語・複文化状態」に接している日本語教師が、教室という空間に「価値としての複言語・複文化主義」をもちこむことで、教室が学習者にとってより居心地の良い、自己表現のしやすいものになるのではないかと感じました。他方、日本語の習得支援というミッションの中で、教室というミクロな現場における言語政策の転換を具体的にどう実践していくか、教師間で共有していくか、仲間と考えていきたいと思いました。たくさんの示唆をいただきました。福島先生はじめ、今回の機会をいただいた嶋田先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

複言語主義は言語政策に基づいていることを再認識しました。日本で公用語、標準語の明記は法律にはないですが、日本で暮らす人が日本語も使いながら共に生きられるようにすることが大切なのだということも、日本語教育を実践するときには欠かせません。
アイデンティティを考えると、国籍という分類も考えられるでしょう。移民、難民にとって、現制度では日本語を話すだけでは「日本人」という国民にはなれませんが、「日本人」「外国人」という枠組みを考えなくてもいい社会を作っていくことも、大切だろうと思います。

言語政策論の歴史をじっくり説明していただいたので、納得できた点や初めて知ったこともあり、大変勉強になりました。ありがとうございます。

とても刺激のお話でした。日本語教育は日本の言語政策の有効なツールとなっている、私が「誰の利害に加担してしまっているのか」を考えることが大事、その通りだと思いました。「日本語ができる」＝「自己実現」と日本語教師は考えがちですが、それは誰の利害なのか、考えることによって実践も変わってくるのではないかと感じました。また「共に生きるため」の社会をつくるためには「価値としての複言語」「価値としての複文化」が大切だと思いました。ただ、それは学校の教育だけの問題なのか。家庭、職場、様々な場、つまり人生の中で人は「価値としての複言語」「価値としての複文化」を学ぶ必要があるのではないかと感じました。もちろん学校の果たす役割は大きいですが、その上で「媒介」に実践を考える大きなヒントがあると思いました。もっと考えていきたいです。ありがとうございました。

「Language Planning」のところが印象に残りました。「『だれが』『だれのために』『なにを』『どのように』行うのか？」を記述すると利害構造が見えやすくなるので、日本の公立の小中学校の授業について考えてみました。

「だれが」→「先生が」、「だれのために」→「児童生徒のために」、「なにを」→「授業を」、「どのように」→「日本語を使って」行う。

ここで、「児童生徒のために」のなかの児童生徒に外国ルーツの子どもが含まれると、「日本語を使って」行う授業は、外国ルーツの児童生徒にとっては利益にはならないのではないかと考えました。そこで「日本語を使って」を「複言語を使って」にすると日本語母語話者の児童生徒にも、そうでない生徒にも利益となる。現状として、「複言語を使って」というのは難しいと思いますが、児童生徒に支給されているタブレットで翻訳機能等を使うと、複言語で助けを得ることができる。「日本語でしか学べない」という考えにとらわれず、学校に「複言語」という考えを取り入れると、子ども達の学ぶ権利を守ることができるのではないかと考えました。

感想というより考察のようになってしまいましたが、大変、勉強になりました。ただ、全体的に私には難しい内容でしたので、「複言語・複文化」について学びを続けていきたいと思っています。
いつも学びの機会をいただき、ありがとうございます。

そもそもヨーロッパの事情に即して生まれた複言語主義という考え方が日本にも必要なのか、必要だとしたら日本ならではの事情とか何か、という根本的なことを考える必要があると思いました。また、日本語学校でのことを念頭において考えていましたが日本人に対する言語教育についても関心が出てきました。先生があらかじめ読んでおくように記事を提供して下さったので、当日のお話がよりわかりました。ありがとうございました。

福島先生、嶋田先生、学びの機会をいただきましてありがとうございました。第14回、第16回、そして今回の第20回を'CEFR'というキーワードを軸にして考えを巡らすという流れを得ることができました。第14回では、「日本語教育の参照枠を2つの問いから理解する」第16回では、日本語教育に関する法律・方針・施策から「日本語教育の参照枠について考える」そして第20回では、「日本語の言語教育における複言語・複文化を考える」一言語政策の視点から一というテーマでした。前2回の学びから得たその時の自分の感想などを読み返しなが今回の学びは何だったかを考えました。今回は、言語政策の成り立ちや意義を整理した形でご教示いただいたことが大きな学びです。それを背景になぜヨーロッパの欧州評議会（Council of Europe）が発足したのかとか、それらが目指すものの必然性や切実さがより理解できたように思います。一つ一つの国の規模は小さいけれど独立した国のアイデンティティを保持し、しかしヨーロッパという陸続きの地理条件にある中で、ヨーロッパという一つのまとまった原理を構成するという知的かつ合理的配慮や施策が必要なのだと考えます。CEFRの参照枠や複言語・複文化という言葉が完全に咀嚼されないまま強いエネルギーをもって日本語教育に影響してきているのではないかと感じています。私なりにいろいろと調べ、学び、考え、自分の考えがさらに深まったり変化したりすることを期待しているのですが、その現状という点からの感想では、日本語教育への複言語・複文化というのは、形態の借用であり、言語の運用力を測る指標としての参照枠（フレームワーク）が日本独自の解釈により上手に転用されることに力を尽くしているような感を持っています。そういう営みを決して否定しているわけではないのですが、背後にある正しい原理や成り立ちを理解することが大切であり、少なくとも複言語・複文化といったキーワードからは切り離して転用するべきではないかと思いません。複言語・複文化の概念を広義解釈して、継承語や世代間、または帰属するグループのうちその括り同士の関連性から日本語教育の中で考えられるそれらの具体例を導き出そうという試みは感心しつつも少し苦しいものを感じました。3つの章立てでご教授いただき、1つめの言語政策理論、2つめの欧州評議会の「複言語・複文化」の説明の展開は非常に参考になりました。それぞれの章立てごとに、問いが立てられていましたが、時間の関係でそれらを参加者同士で話し合う機会がなかったことが非常に残念でした。参加していることへコミットしている実感を持つことができませんでした。しかし、今回の学びをさらに自分なりに深く調べていこうと励みになる問題提起を得ることができたと思います。ありがとうございました。

福島先生ありがとうございました。大学院時代、福島先生の講義によりCEFRの概念を理解する過程は、私の言語教育観に大きな示唆を与えていただいた経験であったことを懐かしく思い出しました。

言語文化教育における複言語複文化主義は、現在よく議論に上がっていると思います。言語政策を視点とすると、日本語教育の参照枠は、「CEFRを参考に日本語学習者の日本語の習得段階に応じて求められる日本語教育の内容及び方法を明らかにし、日本語教育に関わる全ての者が参照できる日本語学習、教授、評価のための枠組み」であるとしていますが、概念の議論はどのくらいされているのであろうかと個人的には疑問です。現状の改革では、なぜCEFRを参照したのか、その説明は十分とはいえないと感じます。日本の国民国家のイデオロギーとどのように結びついていくのでしょうか。参照枠の能力・評価が目を引き、教育機関がその対応に追われているのが現状です。

日本で多言語状況を取り巻く利害構造が複雑化している現在、利害調整の手段としての複言語複文化主義であるとするのであれば、私たちは、その概念の理解に対し、もっと興味を持っていくべきなのではないかと感じます。私は、地域社会で、日本語教育の視点からまちづくりにかかわろうと活動していますが、この活動理念に大きな影響があるのが、複言語複文化主義なのだあらためて感じました。市民としての私たちは、複言語複文化主義を共に生きるための方法の一つとしてとらえ、どのように共同体としての地域社会を作るのかを、当事者であることに自覚的になりながら考え続けていきたい問題だと感じます。

このような機会をいただき、福島先生、嶋田先生、ありがとうございました。

改めて、じっくりと「複言語主義」「多言語主義」について伺うことができ、参加して本当によかったと思っています。

言語政策も政策である以上、誰のために取られていることなのかこれは言語に限らず私たちが今の世の中を生きる上で常に意識しながら、そしてその渦の中でどの部分で何を自分は担っているのか、しっかり見つめ、またその先にはどうしたいのか、どうありたいのか考え続ける者でなければならないと知ることができました。

モノリンガルというのは、ある意味その言語での生活を選択するがそれ以外の選択がないという意味で、国家語だった場合は国家に絡め取られてしまう立場でもあるなと違う視点も得られました。もう15年も前のことですが、アフリカからオーストリアに渡られた家族をルーツに持つ方と知り合った時、色々な話を聞いて「人が国の財産で、税金という一番の収入を国にもたらす」という考え方があり、移民というものをそのように捉えているだから教育を提供してくれるんだと聞かされ、それまでそんな考え方がなかった私は「はっ」としたのを覚えています。

そういう意味で移民、国家、人、言葉、言語政策、利害、アイデンティティ、能力と価値。自分の中のいろんな隙間を埋めてくださる言語政策のお話でした。本当にありがとうございました。

2つの複言語主義についてお話を伺いました。一つは「能力としての複言語主義」。これは、コミュニケーションの目的のために複数の言語を使い、異文化間交流に参加する能力で、商業的に取り入れられるもの。もう一つは、「価値としての複言語主義」。こちらは、多様性を積極的に受け入れることを基盤とした教育的価値で、共に生きるための価値観です。自分や他者が使用する言語が平等な価値を持っていると判断できる価値観で、教育しないと育たないものだと伺いました。言語の違いを尊重しそれぞれが豊かに暮らすために、私はこの「価値としての複言語主義」は日本語教育の教育現場でも、大切にしたいものだと感じました。

では、この「価値としての複言語主義」を日本語教育の現場でどのように応用すればいいのでしょうか。そのことを考えていたとき、ふと学習者のA君のことを思い出しました。

それは、ある日の教室の出来事でした。コンテストに出場するクラスメイトに向けた応援メッセージをクラスみんなで考えていたときのことで、なかなかいいアイデアが出ず、司会の学生も困っている状況でした。とそのとき、A君が、「自分はいいいメッセージを考えることはできないけど、Bさんに聞いてみたい。Bさんはいつもいいアイデアを言ってくれるから。」と言ったのです。私はA君のこの言動に思わず拍手を送りたい気持ちに駆られました。

教育現場ではとかく能力主義的なところがあり、評価の対象はみんなの前に立って成果を発表できる人に向けられることが多いように思います。ですが、複言語主義の現場で大切な働きとなるメディエーション（仲介者）の存在に日本語教育の現場でももっと注目したいと思います。そのためには、教師が能力主義の価値観で学習活動を評価するのではなく、弱い立場の人と共に生きるための教育の一つとして、A君のような仲介的な役割を果たせるような学習者も高く評価し、彼のような役割を果たせるような人を育てる教育を考えていきたいと思いました。自分が主役にならずとも、人と人をつなぐ役割を果たせる人を大切に育てたいと感じました。

複言語・複文化、多言語といった概念が容易に理解できたような気がします。ありがとうございました。最後のスライドにありました「どんな人を育て、どんな言語能力が必要か」「私の現場での政策理念としての複言語・複文化」について、少しずつ考えていきたいと思います。

今わたしが住んでいるベトナムでは、複言語主義だと思いました。裕福な家庭が増えてきたので、小学校から英語を学んでいる学生が多いです。そして、中学校から高校では第一外国語で日本語、韓国語など英語以外の言語も選んで勉強することもできます。やはり、第一外国語は英語です。

高校まで英語を勉強して、英語の勉強を続ける人や就職のために日本語などの第二外国語の学習を積極的に勉強します。

私もベトナム人をみならって、英語とベトナム語をもっと学習しようと思いました。

大変貴重な機会をありがとうございました。今日のお話でこれまでの自分の在り方を確認できました。またもっと言語を教える中で共に分かち合うべき考え方、理念？も見えてきた気がします。それは教育により培われるという点、そして実践のお話も印象的でした。自分も諸先輩方や同僚の皆さんに助けられながら無意識に、また夢中でやってきたことを整理しつつ、これからまた新たな日々を改めて大切に迎えていきたいと思いました。本日は本当にありがとうございました。

言語のコミュニケーション機能について考えることは多かったのですが、アイデンティティ機能について、今回改めてきちんと認識で来た気がしています。本当にありがとうございました。『「人 ことば 社会」を一体的に見る』という視点は私に足りないものでしたので勉強になりました。また、言語政策の在り方についてもっと注意を払う必要があるとも感じました。欧州評議会とEU、NATOの関係性もとてもわかりやすかったです。

ただ、翻って見た時、日本における複言語主義はイメージしにくいと感じました。また、機会があれば、日本における複言語主義は成立するのだろうかや、そのために私たちはどうすればいいのかなどについてぜひお話を伺いたいです。この度は本当にありがとうございました！

複言語、という言葉は、日本語教育能力検定の勉強会で、頭の中の理解しかしていなかったこと、簡単に理解できないこと、自分が不勉強と改めて気づかされました。欧州のように歩いて隣国に行けるような所では、自然と複言語になるのか、日本語標準語と方言は複言語とはいえないのか？などと、考えましたが、私には正直難しい内容でした。せっかくキャンセル待ちで参加できたのに、申し訳ない思いでした。考える機会となりましたこと、ありがとうございました。